

明治の佐伯三青年 29

龍溪・鳴鶴・鶴谷

御手洗 一 而

(賛助会員・川越市小堤)

矢野の洋行 ①

「見渡セバ 野ノ末山ノ端マデモ 花ナキ里ゾナカリ
ケル 今ヲ盛りニ咲キ揃フ 色香愛タキ其花モ 過ギ越
シ方ヲ尋ヌレバ 憂キコトノミゾ多カリキ 霜降ル朝ニ
ハ葉ヲ隕シ 霜降ル夜ニハ枝ヲ折り 枯レシトマデニ眺
メラレ 集リ会フ憂キコトノ 積リ積リシ其中ヲ 耐ヘ
忍ヒシ甲斐アリテ 長閑キ春ニ巡リ逢ヒ 斯ク咲キ出ル
ゾ愛タケレ 世ノ為ニトテ誓ヒテシ 其ノ身ノ上ニ喜ノ
花ノ 苔ハ憂キ事ト 知リナハ何カ憾ムベキ 春ノ花コ
ソ例ナレ 春ノ花コソ愛タケレ」

どこからか朗詠の声が聞こえてくる。

この「春の花」と題する長歌は、矢野が「経国美談」の第十一回「山中ノ隠士福福ヲ説ク 弧村ノ月夜主従再

会ス」の節に挿入した自作の歌である。矢野は維新の際勤王の志士達が作った詩歌が人心の鼓動に効果を示したが、民権運動にはそうした詩歌がないのを考慮し、この一編を作ったのである。立憲政治の春を迎えるためには花のように霜雪の辛苦を耐え忍ぶべきとなざられ、民権運動家の士気を鼓舞した。この「春の花」は、口伝てに人口に膾炙し、「経国美談」は意外な反響を呼んで続編を催促される有様であった。

この時期は、封建時代のうっぶんを晴らすように、米文化の吸収が盛んで、翻訳ものから新体詩・小説類に至るまで、文芸ものの勃興の時期でもあった。報知紙上でも、三月から六月にかけて、四回に分けて、「春宵夜話」としてシェークスピアが紹介された。ところがこの紹介文は社外から投稿の形をとったので、訳者翠嵐生が誰だかわからなかった。のちに判明するが、実はこの翠嵐生とは藤田茂吉の別号であった。当時の学識者は、われ先に欧米の書物を翻訳し、欧米文化の紹介をつとめるのが流行になっていたが、藤田はシェークスピアを通じて、演劇や文学に興味を持つようになっていた。だが、明治二十三年の国会を控えて、民権運動の旗頭として論

陣を張る藤田にとっては、硬い社説を発表する立場から実名は憚られたのかも知れない。こんな時に、七月、維新の功労者であった岩倉具視がその生涯を終えた。岩倉は志を同じくする伊藤の帰国を待ちわびていたが、伊藤は上海まで着いてこの悲報を知った。伊藤等の帰朝は八月四日であった。

伊藤は、在欧中岩倉に手紙を送っている。

「ドイツで有名なグナイスト・スタインの二人の師につき、国家組織の大体を了解できて、皇室の基礎をかため、大権をゆるぎないものにする大眼目は、十分見通しが立ちました。追ってお知らせいたします」

伊藤の自信の程が伺える内容である。

伊藤は当初からドイツ式の立憲制を手本とすべく考えていた。西南戦争後、民権運動が全国に起ると、識者の間でもその方法については意見がまちまちであった。板垣の盟主と仰ぐ自由党は、主権在民を唱え、フランスの自由思想、とくにルソーやモンテスキューの流れをくみ矢野や藤田等の改進黨系は、英国式中庸説をとり、イギリスのスマス・リカドー、ミル等の思想に立脚するものであった。この二大民党に対抗したのが伊藤等の帝政黨

で、ドイツ国憲派と呼ばれた、ビスマルクやスタイン、グナイスト等の思想に拠ったものである。伊藤は、ドイツでプロイセン王国の憲法を学び、改めて立憲君主制の採用に自信を持つようになっていた。

矢野や藤田は、伊藤の帰国によって、政府の出方を固唾をのんで見守っていたが、伊藤は慎重であった。慎重であればある程、矢野や藤田にも考えさせられるものがあった。

報知の上局は二階に陣取っていたが、今日は川風もなく、むし風呂のような暑さであった。藤田は左手で盛んに扇子で風を送りながら草稿を練っていた。

「風が欲しいのう茂吉」

藤田は矢野に声をかけられてペンをとめた。

「矢野さん。伊藤さんは動きませんなあ」

「そうさなあ。一口に憲法といっても、国の大綱となると、そう簡単にはいかぬわい。それに岩倉さんの死も重なった」

「伊藤さんにはその方が痛手でしょう」

「外交・内政に政府はやらねばならぬことが多すぎる。

岩倉さんの死は確かに大きい、不思議なことに洋行帰りは皆おとなしくなる」

藤田は矢野の変な言い方にじっと顔を見つめた。

「あの板垣さんさえもおとなしくなった。一見は百聞にしかずというが、欧米には底知れぬ何かがあると思わねばならぬ。日本の社会制度が幼稚なのはわかるが、伊藤さんも政治と社会の關係に何かを感じたのかもしれない。政府が慎重なのもわかるような気がする。」

「政党の小競合いが馬鹿馬鹿しくなったのでしょうか」
「それもあろうが、差がありすぎることであろう
今の日本が欧米と比較にはならぬが、大体大人は子供とは喧嘩せぬものじゃ」

「となると、わし等も一度洋行したいものですなあ」

藤田の一言が本音であった。

「そのためにも金が欲しいのう」

珍しく矢野が金のことを口に出して大笑いになったが矢野にはあせりもあった。

この頃、政府の要員は、欧米の諸制度を研究するため次々に国費で海外に派遣されたが、矢野や藤田は、いくら報知で論陣を張ったところで、洋行の資金にはおぼつ

かなかつた。井の中の蛙になりにかねない存在が心配の種であった。こんな情勢もあって、大隈は炭鉱や銀行の経営にも手を出すようになっていたが、政党間の軋轢は鳴りをひそめるようになっていた。

矢野はこの機会に、読者の要請に応えるため、経国美談の続編の草稿にとりかゝつたが、矢野に刺戟された藤田も、文明論の構想を練っては筆を取っていた。

いみじくも、「洋行帰りはおとなしくなる」と矢野が言ったように、帰国後の板垣は民権運動の後退ともとれる言動を弄し、遂には党の分裂騒ぎまで起し、自由党の党勢は一度に衰退した。

秋になると、岩倉の死によって政府を預つた伊藤は、この状況を見越したように、立憲帝政党を解散させた。この党は、さきに自由党や立憲改進黨の結成に続き、對抗策として、伊藤や井上が時の東京日々新聞社長福地源一郎や丸山作樂等に結党させた、いわば政府のご用党であった。

矢野や藤田は、この解党を知って一瞬耳を疑つたが、ヨーロッパを視察した伊藤にとっては、この時期の政党争いが馬鹿馬鹿しく思われたのかもしれない。事実、当

時の政党は、資金や確固たる組織もなく、政党を維持するにも困難な時代で、自由党も翌年には解散することになる。

しかし、伊藤は社会の趨勢に対して、たゞじつと静観していたわけではない。伊藤が長くドイツに滞在し、プロイセン王国の憲法を学んだのには、それなりの理由があった。ドイツの立憲君主制の採用が日本に最適であると自信を持ったからである。つまり、維新後の日本の新社会にあっては、旧武士や一般市民の階級闘争が盛んでこれを一本にまとめるには、皇室を崇拜する国民性から天皇を中心にとまとめるのが、新国家建設に最適とふんだのである。伊藤は、帰国後表立った動きは避けたが、地下では着々とその地盤固めに奔走していた。

そんな矢先に、十一月に麹町の内幸町にルネッサンス式の洋館が完成した。洋館は十四万円という当時の巨費を投じ、三年の歳月をかけ、前庭の池の傍には高く大きなガス灯が輝き、正面玄関には、「鹿鳴館」の三文字がくっきりと照らし出されていた。竣工の夜宴には、各国外交官・皇族・華族や高官が、着飾った洋装の夫人や令嬢を同伴し、矢野や藤田もフロックコートに威儀を正し

著名人として参列した。矢野や藤田は、その華やかさに眼を見張ったが、これも政府の欧化政策の一つであった。

鹿鳴館は、時の外務卿井上馨等が発起人となり、外国貴賓の接待や上流階級の社交場としてつくったものであるが、井上にしてみれば、外国との条約改正に利用しようとの魂胆であった。維新以来の外国との不平等条約に対抗して、井上は改正案を立てて、明治十五年から交渉を始めていたが、条約改正会議の開始にこぎつけるのは明治十八年五月のことである。

こうして明治十七年を迎えるが、正月が明けて矢野が出社すると、

「矢野さん。正月早々経国美談後編の話が来ますよ」

藤田の声に、出版社の社長は掌で遮りながら、新年の挨拶をすませると、三人は赤々と燃える大火鉢を囲んだ。「なんだ。その話ではなかったのか」

藤田が口を切ると、
「それもありますか」

と、社長は頭に手をやった。

「矢野さん。後編は来月にも出来ませんが、前編の思わぬ

売れ行きに驚いております。来月で頂度一年の決算ですが、この分では希望にそえるかもしれませんが」

社長の話に、藤田は何の事かと火箸をつついていたが「そうか。大願成就するか」

矢野は大声と共に、藤田の肩を勢よく叩いて、藤田を驚かせた。

「茂吉。思わぬ印税で洋行出来るかもしれぬ」

印税・洋行と聞いて、藤田は大きな眼を更に大きくした。

「本の売れ行きも馬鹿にならぬのう」

藤田の実感であった。

「間違いなかるうのう。とすれば、全部つき込むか」

矢野は既に洋行気分であった。

「その代り、洋行の紀行文は頼みますよ」

矢野は大きく頷いた。

「俺も後に続くか」

社長は藤田の顔を見詰めた。

「何か草案でも」

「うん、大体終っている」

「そうですか。その節は当社にー」

二人の短い会話にも、矢野はうわの空であった。

矢野は『経国美談』の思わぬ印税により、洋行は二月に決定的となり、出発を四月に選んで、準備に忙殺されることになった。

その頃、報知社内では、藤田と佐藤との間に一つの問題が起っていた。

藤田は、昨年シェークスピアを報知紙上に紹介し、その続編を用意していた。その矢先に、静岡の地方新聞である「函右日報」に、藤田の意図する続編がすっぱ抜かれた形となり驚いていた。

「函右日報」は、改進黨の党勢拡張のため買収した地方紙であるが、その一四〇号から第一回「風動花枝ハナヅキ探サツル月影ツキカゲ天開月鏡テンカイゲツキョウ照花妖テウカウ」として掲載され、署名に「在東京 菊亭香水訳」とあった。内容は勿論『ロミオとジュリエット』の大意を小説風に直して連載中であった。藤田はこの菊亭香水が、既に『世路日記』の小説を刊行した佐藤蔵太郎のペンネームであることを知っていた。それよりも、昨年以來藤田がシェークスピアを翻訳し、紹介の労を取り続けていることが、佐藤も承知しながらこの挙に出たことの方が腹立たしかった。その上、佐藤

は、誰かに翻訳を依頼しなければ語学力のないこともわかっていた。

おさまらない藤田は、退社前に佐藤を呼びつけて「**函右日報**」をつきつけた。

「佐藤。これはなんだ。随分ひどいではないか。今度、俺が昨年の続きで紹介しようと思っっているのに、当てつけがましく先を越された。評判にかこつけるのもよいが誰に訳してもらった」

藤田は佐藤をなじった。

「別に悪気があった訳ではありませんが、題材が面白いと思っ—」

「そりゃ、これ程評判になると面白いに決まっっているが少しは先駆者の労も弁えろ」

藤田の言い方に、気の強い佐藤は一瞬むっとなったが訳文の出所だけは口に出さなかった。佐藤は、この話を後に小栗家に入る矢野の弟貞雄から聞いて小説化したのである。

「連載はいつまで続けるのか」

「六回分の原稿を送っていますが、その後は中止することにします」

佐藤は、小説と翻訳は違うとは思ったが、報知の上司であり、少しは氣拙かったのか、こう答えるしか仕方がなかった。

後日、この連載は**函右日報**の二月二十六日付で、菊亭氏が病気のため、全快まで一旦中止すると発表されたが、藤田と佐藤の仲は、以後拙くなり、佐藤は矢野の洋行を待って、報知を退社することを考えるようになっていた。

一方、矢野は、経国美談後編の刊行と洋行準備に追われ二人の確執など知る由もなかった。改進黨の政策から主として洋行先の研修を英国にしぼり、憲法や諸制度の問題点を整理するためにも、師の福沢や改進黨領袖大隈の間を駆け廻っていたが、三月に入ると、伊藤が動き出した。

伊藤は、宮内省部内に、憲法制度取調局を設け、本格的に憲法制度の準備に入った。噂は直ちに外部にもれたが、伊藤が最も恐れたのは外部からの干渉であった。そのため内密に宮内省内に一局を設けたのであるが、そうとわかると、政党や新聞社はこぞって内情の探索に努めた。

報知社内でも喧喧ごうごうの意見が飛び交った。

「おい。局の面容はわからぬか」

「人容どころか。密室の話じゃどうせ薩長に都合のよい制度になるに違いない」

「馬鹿言え。憲法となると国の大綱だぞ。そんなことが許せるか」

「それならば外部からも人を容ればよいではないか」

「何いつ。どうせドイツ崇拜の伊藤のことじゃ。大方の見当はつくわい」

さすがに、新聞社員の意見だけあって、的は射っていたが、騒々しいことは連日うんざりする程であった。しかし、局の内容は容易に外部にはもれなかった。

この憲法制度の事業に従事したのは、井上 毅・金子 堅太郎・伊東己代治等で、宮内大臣徳大寺実則の監督下にあったが、勿論、統率指揮を取るのは伊藤博文であった。

矢野や藤田は、その内情が知れずにもどかしさを感じたが、議会開設までまだ数年ある。それまでに英国の制度を研修出来るのも、天から与えられた恵みかもしれない。時間を大切にしなければならぬ。矢野はそう思っ

て、四月に横浜から勇躍洋行の途についた。

本編は、一挙に掲載の予定でしたが、作者の体調が優れぬため、やむなく二回にわけて掲載したい旨の連絡がありました。一日も早いご快復をお祈りします。

